

# 海軍

## 吾れ赤道越えて戦えり

兵庫県 片桐 敏 男

私の生まれ育った所は、但馬地方の中心で昔は大変栄えた所です。少し山奥に入った所に、生野銀山・明延銅山があり、戦国乱世の初期時代に山名宗全が和田山城（虎臥城）を築城し、以来時代と共に城主の変遷を見たところです。現在は城閣は無く、その城郭・石塁が広大な基盤を残し留め、往時を偲ばせています。山麓は円山川の清き流れがあつて風光明媚で観光地として一役を担っています。

このような環境の中に、両親と姉弟妹の長男として

生まれ、祖父母健在で八人家族でした。私が八歳の時、父が急逝し、以来近隣にいた叔父の力を借りながら、腕白盛りでも長男であることを自覚し一生懸命に働き、家族全員元気で暮らしていました。家業は農業で中程度の生活でした。

昭和十二年三月に和田山尋常高等小学校を卒業して大阪の叔父の会社で働きながら大淀区長柄青年学校に三カ月間学びました。会社は大発工業の下請工場で軍需産業の花形でした。青年学校は心身の鍛錬と、教科で教養を修めて立派な青年を育成するところでした。身体が頑健で、負けず嫌いの気性でしたから、銃剣術でも一番強く、卒業も成績優秀で賞をもらいました。大東亜戦争もますます拡大して多くの人が召集されていきました。昭和十八年夏に故郷の小学校で徴兵検

查があり、故郷に帰って町の友達と一緒に受験場へ行き、役場の兵事係から種々な説明を聞きました。彼は一生懸命みんなの世話をしていました。諸検査が終わって徴兵官から「片桐敏男、第一乙種合格」と申し渡されました。その後で兵事係から「第一乙種は甲種合格に編入になる」と言われ、その心底で準備せよでした。

翌年一月十日に呉海兵団に入団せよと通知がきました。私は海で泳いだことがないので、海軍とは大変なことになったと思いました。万一水死でもしたら、母や姉弟に相済まぬことになると思いましたが、当時の男としては絶対務めねばならぬ義務でした。ちなみに陸軍の場合は入営と言いました。同郷の友達で歩兵は鳥取の第六十三連隊に、工兵は岡山の工兵第十連隊、野砲と輜重と通信はそれぞれ姫路の各十連隊へ現役兵として入営でした。入団したら、現役兵が十人ほどいました。出発前に町を挙げての壮行会が催され、それぞれ激励の言葉を頂戴し「万歳、万歳」の声と旗の波に送られて、懐かしの故郷を後にしました。

呉海兵団の入団式（同年兵六十人ほど）での部隊長の訓示は現在も耳にあります。「貴君達は只今から帝国海軍の軍人である。我が隊においては、一人の優秀な軍人は不必要である。全員が落伍せず、各自の任務を全うすることを要求する。一人の不注意・不心得者のために、艦船が一瞬にして海の藻屑と化するのだ。心して軍務に励め」でした。当日はお客さん扱いでいろいろな所を古兵（教育係）に案内されました。翌朝、起床喇叭で飛び起き、教育係の怒号罵声で度胆を抜かれました。「行動は敏速に、言語は大きく」「貴様達は現役兵だぞ、気合を入れて何事もテキパキやるのだ」など。

三月二十日に一期の検閲がありました。その間は陸軍と同様の新兵教育で、地上における訓練演習実技と内務の学科教育でした。陸軍との差異は海軍には軍人精神打ち込み棒というものがあり、ちょうど野球のバットを大きくしたような木製の棒で、一人の失敗は全員の責任だと言って、連帯責任を負わされることでした。そのような事故、失敗者、守務違反者が出た時は

全員の尻が精神打ち込み棒の洗礼を受けました。三打罰・五打罰といって力いっぱい叩かれました。尻の皮が腫れ上がったって便所へ行っても屈むのに涙が出る程痛かったです。個人的な私的制裁はなく、自分は青年学校を卒業していたから他の戦友より何かについて有利なことが多かったのですが、全隊責任の罰は致し方なく同罪でした。

いよいよ特業の任命があり、自分は航空機整備兵（水上機・俗に下駄履き機という）の外装、特にフロートの整備でした。艦上勤務ではなく港湾にての勤務でヤレヤレと思いました。任地の原隊に向かって出発の日が近づいて、家族との面会が許されました。軍港の外に出て母や妹との別れをしました。この時には行く先は不明でした。

三月二十七日出発と決定しました。アンボン島のハロン第九三四海軍航空隊が原隊でした。一度も聞いたこともなく、どこにあるのかも知らなかったの、「赤道の南だ」と先輩に教えられて驚きました。呉の軍港には巨大な軍艦が幾艘も繋留されていました。自分達

の乗船（艦）は最新鋭の航空母艦「瑞鶴」（五万七千トン）で、これに便乗しての出陣でした。艦隊勤務の厳格さは、海兵団にいた時以上に激しいものでした。精神打ち込み棒が一日に何回も風を切って尻に飛んできました。歩行困難なほどに腫れ上がりました。全員苦勞に耐え励ましあいました。これが戦友として強い絆のはじまりでした。波穏やかな時もしげの時も艦隊は堂々と進み、伊予水道から沖繩列島に沿って南下しました。

台湾を経て、東シナ海・ルソン島西方海域に入ったと思う四月三日、突然伝令管から耳をつんざくような声で「空襲警報発令」があり「各員戦闘配置に就け」でした。本艦をはじめ随行の巡洋艦、駆逐艦等からの対空砲火が一斉に火蓋を切りました。あたかも百雷の落ちた如き音響と振動、艦は大きく右に左にと旋回しながら航行しました。友軍の飛行機も迎撃に飛び立っていたと思います。

自分達は初めての体験で何も解らず、戦闘員の邪魔にならぬように第二甲板の一隅に息を潜めてただ傍観

するのみでした。時間にして二十分程でしたが、腰が抜けたような状態で怖く恐ろしく、身体は震え、心から神仏に念じていました。古兵達は勇敢な活躍をしていました。同じ海軍でも艦隊勤務者と自分達のような陸上勤務者の差異をまざまざと見せつけられ、だてに海軍の飯を喰っていないと戦友と語りました。入団時の訓示の如く全員が一丸となって働くことが艦を守り敵に勝つのだと痛感しました。

上甲板や艦橋の辺りにて数人の戦死・傷者が出ました。戦死者は第二甲板に安置し、戦傷者は医務室に運ばれ収容、手当てを受けました。正午の時報を合図に戦死者の水葬礼が行われ「初年兵は整列してお見送りを行え」と命ぜられ、中甲板の舷側に整列して「気を付け、敬礼」で全員厳肅な心で敬礼の中、哀しい音色の喇叭が吹奏され、戸板のような台上に安置された英霊が一体また一体と波穏やかな紺碧の海に送られて行きました。不動の姿勢で誰かが「海行かば」を唱い出しました。全員が唱和しました。自分も涙が頬を伝って流れ、全員肩を震わせて嗚咽していました。目は大

海原の一点を凝視しながら、頭に浮かんだことは英魂は遠く九段の社に、故郷の母の元に還られたらどうか……でした。

四月十日、シンガポールに入港し即上陸を命ぜられました。自分達は次便を待つてジャワ島に行くことになり、その間も種々な教育を受けました。自分は突然高熱が出て体温計で測ると四〇度もありました。軍医に「即入院せよ」と命ぜられ仮設病舎に入院しました。マラリアで二週間ほどで退院しましたが、その後も時々再発しました。絶えず特效薬のキニーネを所持していました。

艦隊は出動して自分達は現地徴発の貨物船（軍用船）に乗ってジャワ島に向かって出港しました。知らぬ間に赤道を通過して南半球にきていました。普通、赤道通過の時は「赤道祭」を行うようですが、軍用船はそのような行事はなく、対空と対潜水艦の警戒を厳重に行いながら、ジャカルタに到着しました。現地部隊の水上飛行機の整備をやらされ、引き続きスラ

バヤに移動し、ここでも同じような任務を行いました。

更に次なる基地へと海軍の空軍基地を転々と巡回し整備の任務を全うし、知らぬ間に四カ月余り経過していました。そして艦を乗り継ぎ、アンボン島のハロン第九三四海軍航空隊（原隊）に到着しました。呉の軍港出発して以来一カ月半を経過した昭和十九年五月十日でした。

モルッカ群島のセラム島のそばの小さな島ですが、波穏やかな入り江があって水上飛行機には格好の基地でした。陸海軍共に大勢の軍隊がいました。海軍の近くは椰子林で少し奥はジャングルでした。敵襲を避けるために竹の柱に椰子の葉で屋根を葺き、原住民の家のように擬装した仮兵舎で生活し勤務していました。勿論この頃は飛行機も数少なくなり、自分達は陸戦隊に改編され三八式歩兵銃を全員持っていて、地上戦闘の訓練を行いました。

七月頃より敵の空襲が強烈になり、早朝から日没まで一日何回となく、単機偵察や編隊による来襲に悩ま

されました。猛爆撃と超低空での機銃の乱射で、一寸の油断も出来ず、その度ごとに犠牲者が増加しました。最初は丁重に弔い、夜間に穴を掘って茶毘に付しましたが、そのうちに明日は自分の順番かもしれぬと思うようになり、戦友の亡骸を眺めながら声を上げて慟哭しました。

戦後三十年頃の映画で俳優の加東大介さん主演の「南の島に雪が降る」を見て、あたかも自分達の部隊がモデルになって映画化されたように思いました。

その概略は、以下のようなものでした。遠く南方熱帯の離れ小島に一部隊が守備の任に当たり、敵の艦砲射撃と空爆とで、完膚無きまで叩きのめされ、ジャングルに覆われた島も裸の小島と変貌しました。敵の猛攻は終わり、自然に自滅すると敵は察知し次期目的地に向かって進攻したようでした。食糧・弾薬は欠乏し、傷痍の兵に医薬無く、ただ餓死する時を待つばかり、士気は喪失し惨憺たる状況下になりました。それでも自分達軍人は今に見ている、海上には軍艦旗を風に靡かせた多数の艦隊が来て、空には日の丸も鮮やか

な銀翼を連れ友軍機が飛来するぞと夢のようなことを語りながらも今一人、また一人と戦死していきました。

このような現状で加東軍曹の熱演を見ました。故郷を夢見て息絶える戦友、少しでも郷里を思い出し死出の旅に心安らかに送ってやろうと、上官に進言して演じた芝居でした。最高の演出熱演でした。野戦病院から担架で運ばれた傷痍者、戦友の背中に負われて来た者、松葉杖にすがってたどり着く者、その他独歩の戦傷者、一応健常らしき兵隊も、南の島に雪を降らせる部隊の名場面、名演技に、全員が涙、涙でした。この情景の演技を見ながら遠き故郷を偲びつつ息を引き取った兵隊もいました。

自分も戦後平和な時代にこの映画を眺めながら、往時のアンボン島を思い起こして涙なくしては見られませんでした。

転進命令でニューギニアの近くの小島（二キロ四方）に移動しました。飛行機の燃料基地でした。食糧

がなくて主計兵が魚介類や海藻を採ってきました。中でも海亀の肉は美味で、主食のように食わされました。米が一粒も無い日が幾日も続きました。夢でお茶漬けを喰うような状況でした。引き続きボルネオ島のパンジャルマンシンに転進しました。この地は原油の産地で地下油田から原油を吹き上げる光景は実に見事でした。戦時下であることを少しの間忘れさせる光景でした。

日時は忘れましたがまた転進で、ジャワ島のジャカルタに行きました。四月二十九日（昭和天皇誕生日・天長節）、今夜の食事は御馳走がたくさんあると聞いて喜びました。食することが一番の楽しみでした。食卓には肉の油焼きで喰い放題といって満腹になるほど食べました。美味で全員が童心に帰って満面笑みを浮かべて楽しみました。その後で同年兵が「食堂の裏へ行ってみよ」と言うので見に行つて喫驚しました。そこには大蛇（錦蛇）の皮が沢山竿に干してありました。炊事係は「日本への土産にするのだ」とのんきなことを言っていました。

ストラバヤへの移動命令が出ました。航空機の数も少なくなり、僅か数機の整備でした。自分もお陰で要領よくかなり立派な整備士となりました。敗戦に次ぐ敗戦で南半球の島から島へと、転進・移動の連続でした。飢餓・風土病・疲労困憊の極に至ったことなど数々の事柄も、長い年月を経過したことで忘れ去りました。

最後に忌まわしい思い出は、終戦の八月十五日に最後まで残っていた海軍水上飛行機が敵軍に向かって飛び立ったことです。「全員帽を振れ」で地上勤務者全員が帽子を打ち振って見送りました。全機還らず。大空の彼方で散華したか、大海原の藻屑と化せしことでしょうか。残念に思いました。僚機出陣の直後に航空無線で終戦の命令が下り、「即時戦闘停止」の命令でした。今少し早く入電していたら、あたかも若桜の軍人が華と散ることもなかったのに……。だが自分は「はっ」としたことは偽らざる心情でした。

南国の島から島と一年八カ月の間、移動・転進・退

却とどの言葉が一番適切か自分には解りませんが、動き回ったこと、それも島から島へということは事実明瞭です。

旬日を経ずして、英国の軍使が来ました。武装解除について幹部に命令・談合された由。英軍の軍使は非常に紳士的な態度とのことでした。英軍兵士によって武装解除され即座に輸送船に乗せられて出港しました。「豪州かインドに送られるかも」という声が兵隊の間で囁かれていました。着いた所はシンガポールの間で南方六〇キロの無人島でした。ストラバヤからこの島までは直線距離では東京から鹿児島より遠いくらいです。思い返しても気の遠くなるような船旅を何回も何回も繰り返しました。

英軍支給の糧秣は僅かで、不足分は自給自足せよでした。農具等を準備してくれて、耕地を指示され畑を耕して促成野菜や芋類を栽培しました。海岸では魚や貝を採り、なんとか生活していました。畑の作物は土地が肥沃な上に雨が一日一回必ず降るので良く育ちま

した。この雨がスコール（大夕立）で驚く程瞬時に多量降ります。これを利用してシャワーをするため、西空に黒い雲が出て来たら身体に石鹸を塗って待っていて、スコールを浴びて出来上がりでした。砲撃も爆撃もないということは楽な気分でした。

捕虜生活を一年送った昭和二十一年八月に、日本の輸送船が入港して来ました。戦闘中は一度も感じなかった赤道直下の燃える太陽・日の出・夕陽の美しさ、空は群青色、海は紺碧で水平線で空と海が交わり一緒に輝いています。夜空の星は降るように光り輝き、終戦で捕虜生活をしたことで、初めて南国の大自然の素晴らしい美しさを味わうことが出来ました。

帰国のための乗船、人員は不明でした。誰しも一日も早く帰りたい、俺が先だ、貴様が先では困ると、陰でひそひそ話していました。「部隊全員乗船帰国」と発表され、全員安堵しました。船は一路北方に進路をとっています。一週間の航海の末に鹿児島湾に入港、検疫を受けて、いざ上陸。時に昭和二十一年八月十日

でした。

日本の大地を踏み締め、万感胸に迫るものを感じました。復員事務処理完了、部隊解散となりました。

鹿児島本線から山陽本線と鈍行列車は自分の気持ちに反して遅々として進まず、車窓に写る風景には、完膚なきまで叩きのめされました。瓦礫の街でした。再建日本を心に誓いながら姫路駅から播但線に乗り、鹿児島出発以来五日後の八月十五日、幼少の頃より見馴れた虎臥城跡が車窓に見えました。「もういつ死んでも良い」というような気がしました。

竹田の駅には誰もおらず暗く淋しい様子でした。駅前に立って出征時を思い浮かべ、故郷の大気を胸いっぱい吸い込んで我が家へと足を運びました。「ただいま」の声に家族全員が喫驚し喜んで出迎えてくれました。仏壇の父の霊前に香を焚き、無事に帰国報告し、ご加護に感謝申し上げます。自分の無事帰還出来たのは神仏のご加護をはじめ散華された多くの戦友のお陰であることを、今も心に強く刻み込んでいます。



平和日本のありがたさ、そしてその礎となられた多くの戦死された英霊に感謝しています。二度と戦争の無いことを望みます。合掌

## 第五二号駆潜艇奮戦記

埼玉県 原 口 喜三郎

私は大正十年十月十三日埼玉県北足立郡吹上町で生まれました。昭和十六年鴻巣市で徴兵検査、見事甲種合格。徴兵官より笑顔で「良い体をしている」とほめられました。内心父母に感謝したことです。

昭和十七年九月一日、横須賀海兵団に入隊した当時の私の家庭は次の通りです。

父母、農業。田は一・五町歩、畑は十町歩。畑のうち八反歩は桑畑で、養蚕をする。長兄、生後一週間で死亡。次兄、中支衡陽作戦で戦死。三兄、小学校一年生で死亡。長女、他家へ嫁ぐ。私四男、東京でクリーニング店勤務。五男、中支に出征―無事生還。六男、

家業手伝い。妹四人、家事手伝い。

大世帯で、豊かではないが、まあまあ状態で忙しく働く家庭でした。復員後四男の私が家業の農業を後継しております。

海兵団に入隊し三カ月は新兵教育です。予想通りの苦しい厳しい辛い日の連続は、数多くの物語、戦記、従戦記等の語り伝えで周知の通り。何くそ！と頑張って難関を通過しました。新兵の一個分隊は二四〇人。十二教班（二教班二〇人）に分かれます。私は第九教班でした。二〇人のうち三番以内に入るとどこでも進級が早く、私は運良く一番になり、特別扱いで優遇されました。勉強もよくやりました。ハンモックが通路の電灯の下にありましたので一生懸命に本を読み、上級学校者に負けぬよう努力出来ました。運も良かったと思います。

新兵教育が終わり、ウエーク島（硫黄島とミッドウェイ諸島の中間で南方）へ配属です。敵の潜水艦攻撃が烈しく、私たちも乗船（商船―輸送船）が三回やら